

墨川亭雪麿『傾城三国志』翻刻（7）第四編上帙

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2019-01-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 神田, 正行 メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/10291/19855 |

墨川亨雪麿 『傾城三国志』 翻刻（七）——第四編上帙——

神田正行

凡例

- 一、仮名は一部を除いて、ひらがなに統一した。また、会話を示す「」や、句読・濁点などを適宜補った。
- 一、読み誤りのない範囲で漢字を宛てた。その際、もとの表記を傍訓で残したものもある。また、原本における振り仮名は、一部を除き省略した。
- 一、文章を読む順序を示した「合印」あいにしるは、その多くを形の近い記号で代用した。
- 一、本文には、内容にもとづいて適宜段落を設けた。また、「巻（五丁の単位）」ごとに改段を施した。
- 一、見開きが改まる位置には、「（4ウ・5オ）」の形で丁数を示した。
- 一、各人物が初めて、もしくは久々に登場する場面では、原作『通俗三国志』の相当する人物を【】内に注記した。また一部の地名や事物についても、同様の処置を行なった。「▼」印以下は、稿者による注記である。
- 一、影印ならびに翻刻の底本は、佐藤悟氏蔵本である。

《第一冊 表紙》



喜鶴堂寿桜
甲午新刊

劉表 【▼駒絵内。中央は本作の矢表】
雪麿作 国貞画
傾城三國志四編 上帙上冊

《第一冊 前表紙見返し・二丁表 自序》

傾城三國志第四編序

寒竹の影も江戸の骨に依り、桐花の影も大活の影に依り、
 の影も自らの影に依り、海千の調子も、得易武、
 王半世の影も、市井の影に依り、越前清珠の影も、
 目多る影も、
 中世の影も、
 時を音、
 用其物、
 各新、
 口九、

天保五年甲午春新繪草紙

墨川亭雪麿作

傾城三國志第四編序

寒竹も恋も江戸では骨をらず、とは柳樽の妙吟也。実、大江戸の大都会、余國の及ばぬ万事の自由さ。物として得ざるは勿く、事として調はざるなし。得易く求安きこと、大千世界の珍貨珍宝、市肆に山をなし、超壁階珠はいふも更也、よしや燕の子安貝なりとも、償ひ得ずといふことなし。数罟冷池に入りねど、魚籠の絶ぬ肴市、初春の白魚は、織独活と形を争ひ、青首の生鳥、何がし町に庖厨を遠くの謂に協ひ、寒中の鮫鱧雪中の河豚、すべて価の高間原、佳味とゞまりましく、口に諸の美食をくらひ、心に頃日の驕を知らず。地蓋と称ふる泥亀鍋に、霧たち登る秋の夕暮、熬鳥鍋に時雨の音して、初鮭の肉に紅葉を染なす、四季折々の料理の献立、走りを遣ひ困いを用ひ、其物をそれに食せぬは、庖人の方寸より出、手際に工をあらはして、妙々奇絶と悦ばしむ、会席料理の奇麗ごとに、口取果子の新製には、八種唐果子、餛籠桂心の古きを廃て、各新きを大專となし、巧に心を煉羊羹、小倉羹には定家卿、色紙めきたる外郎求肥、

口にカルメラカステイラ、孰れをいづれ精製の、五羹水織甘きを第一、総て奇きと巧なるを、競ふが中に繁華の土地は、興廃はやく速にて、去年の流行今年の後れ、昨日と今日の早替、みな移氣の世中なれば、時好を通ず衣服まで、染色模様には好を尽し、或は縞柄小紋形、某乙繫ぎ何崩と、種々様々にむづかしく、時花の地合を吾先と、争ふほどに着飾る程に、或は唐縞子琉球紬、玉紬の八千代まで、かはらぬ色や藍万の、結城は勇氣に音通ひて、強い自慢の小弁慶、江戸紫の曙、染に、ちよつと墨絵の蝙蝠は、襦袢の襟にも飛もやう、なんでも瓢箪転ばすの、下駄は台広替茶の、二二くの鼻緒青皮の細緒、足先から天窓の上まで、悉皆心を用ひざるなく、衣食に満足太平の恩沢。竹の耳搔が四文々と、橋結にたつ月日も、それ相応の耳たぶや、臍くりを溜る老爺あり、お花荒神松のりやのりと三文の商して、口を粘する婆あり。千差万別のその中に、職人尽にもいまだ見ぬ、話家戯作者の商売いできてより、年々に流行なし、吾等ごときも其数に、加へられても素人に、ちと毛の生た

戯作者ながら、絡繰て出たる三国志も、今年で丁度四編めの、四い評判を希ふになん。

天保五甲午春新絵草紙

墨川亭雪麿作

▼一丁表欄上に、巻次を示す「(一)」。

《略注》

◆寒竹も恋も江戸では骨をらず↓文政六年刊行の、『柳樽』第七十六編に見える。

◆趙璧↓楚の下和が荊山で得た原石から作られた璧。ちに趙の恵王が所持した。いわゆる「連城璧」。

◆隋珠↓隋侯に助けられた蛇が、侯に献じた珠玉。「霊蛇珠」「明月珠」なども称する(『搜神記』)。

◆燕の子安貝↓『竹取物語』で、かぐや姫が石上麻呂足に求めた宝。

◆数罟洿池に↓『孟子』梁惠王章句に、「数罟不レ入洿池、魚鼈不レ可レ勝食」也」とある。

◆庖厨を遠く↓やはり『孟子』梁惠王章句に、「是以君子遠^{ハト}庖厨^ヲ」也」とある。

◆佳味とぐまりまし〜て↓「高間原」の縁で、「佳味」に「神」を効かせる。

◆口に諸の美食をくらひ〜↓「仮名手本忠臣蔵」七段目における由良之助の言葉、「口にもろ〜の不浄をいふても、慎に慎を重る由良ノ助に」を踏まえるか。

◆霧たち登る秋の夕暮↓「むらさめの露もまだひぬ真木の葉に霧たちのぼる秋の夕暮」(新古今・秋。寂蓮法師)。百人一首にも入るので、「小倉羹には定家卿」と縁がある。

◆八種唐果子餲籠桂心↓『南歌秀言』巻上「干果子」に、「源順和名鈔に、(中略)「一名団喜。俗以^ニ梅枝・桃枝・餲籠・桂心・黏臍・饅饅・鮓子・団喜^ヲ謂^フ之^ヲ八種唐果子」とみえたれば、餲籠・桂心・渾沌の三は唐より伝へ、加久繩は此方の製なるべし」(大田南畝全集第10巻四〇八頁)とある。

◆水織↓煮た葛粉を固めて、短冊形に切った菓子。

◆橋結↓「橋詰」か。

◆お花荒神松のりやのり↓「姫糊売り」のかけ声。

《二丁裏・二丁表》



難波五女侠一個 布袋阿市【范康】

五女侠 首領 賭弓 矢表【劉表】

▼駒絵内「劉表」。

同 極印阿千【孔昱】

同 霹靂阿雷【陳翔】

▼駒絵内「陳翔」。

同 雁金阿文【范滂】

▼「難波五女侠」、原作では「江夏八俊」。残る三人も、蟻通七曲・都路九重・よろづはの甘巻として登場する。一五〇頁参照。

《二丁裏・三丁表》



純友姉 竹束媛【孫策】

荒乳山村雲【趙雲】

▼駒絵内「趙雲」。

通神玉章【公孫瓚】

▼駒絵内「公孫瓚」。

堅田下部折助【袁紹同郷の兵卒】

《三丁裏・四丁表》



俳優 花村蟬之助
【貂蟬】

艶書 千束
【王允】

▼駒絵内「王允」。

伊予大掾純友
【孫仁】

純友姉 權化媛
【孫權】

▼駒絵内「孫權」。



(4ウ・5オ 折鶴、敗戦を報告する)

さる程に伊予の掾純友【孫仁】の母なりける、堅田【孫堅】はいたくうち腹立ち、折鶴【李准】を罵りやまず、「今我汝を斬らずして、追ひ返すは他ならず。早くたち帰りてこの事を、董根婆に告げよかし。汝が命は助け得せん。もしまた帰り遅からば、肉醢、骨は臍に、作りて酒の肴にせん」と、噛みつくごとく罵られて、折鶴は戦き怖れ、頭を抱えて猫に会ふ、鼠のごとく逃げ帰り、董根の前に出で、ことしかくと告ぐるにぞ、堅田が無礼を、董根は大きに怒りて、杏【李儒】を呼び出だし、顛末を具に語り、「いかゞしてよからめ」と、問ふに杏襟かき合はせ、「此度御局新たに敗れて、兵戦ふ心なければ、兵を一つにひきまとめ、東山に凱陣ありて、東の御殿【洛陽】を西の京【長安】に、移し給はゞしかるべし。その故はこの日ごろ、道の巷に京童の、小唄歌ふを聞たるに、山の後ろに吹く風寒や。早う飲みたし烟酒をといふ。わなみつらくこの歌の、心を鑑見たる所に、「山の後ろ」は、字書に嘽とあり。これ東山の心にて、すなはち東の御殿を指す。また「吹く風寒

や」は住憂心なり。また「早う飲みたし爛酒を」と、いはるは酒は、さんずいにひよみのとりにて、酉の方はすなはち西なり、さんずいはこれ水なり。西の水とは地名にて、大堰川のあたりをいふならん。しかればこの歌の心は、住み憂き東の御殿をば、早く西の方へ移しつ、かねて御靈姫【靈帝】の御時より、営みおかれし大堰川の、別館にわたましあれと、世の諸人も思ふにこそ、かくは童すら歌ふならめ。これ全く御局の、天運に適ひ給ふところにして、歌は即ち吉兆なり。早くこの義に従ひ給へ」と、弁舌さへも滔々と、木に口つけし杏が、口から先へ生まれや、げに立て板に水車、口の車は回りけり。董根ほた／＼うち喜び、「よくこそ心つかれたり。御身が言葉なき時は、わなみ実にこれを悟らず。右へ／＼左よりよに持つべきは嫁なりけり」と、褒めそやしつ、調布【呂布】にも、そのよしを告げ聞こえ、すぐさま東山にたち帰り、諸人を呼び集へて、御殿を西へ☆／＼移すのよしを、告げてその心構へを、なすべきよしをさし示すに、中より座席を進み出で、揚巻【楊彪】・外面

【周毖】・此面【伍瓊】らが、「ゆるゑもなきに御殿をば、他所へ移すはよからず」と、諫むるに董根は、我が意に逆ふを憤り、揚巻が官位を、削りて館を追ひ退け、また外面・此面をば、武士に言ひつけ頭を斬らせ、その後諫めの道を絶ちしは、無慙なりける女なり。

されば東の御殿をば、西の方に移すこと、手軽き業にあらねども、董根が勢ひもて、様々に下知を伝へしかば、ことはかゆきてたちまちに、館移しになりしかども、金銀に乏しければ、杏が計らひにて、東山辺は富める商人、また百姓ら多ければ、これらをば殺し尽して、蓄へたる金銀家財を、みなこと／＼かすめ取り、これを費える助けに当て、さてその百姓・商人らが、家居には火をかけて、こと／＼く焼き失ふ。そのひまに軍卒どもは、妻や娘をおし捕らへ、おのがまゝに淫するあれば、また食物を奪ひ取り、ほしいまゝに次へ（4ウ・5オ）／＼食しつゝ、乱暴狼籍を働くものから、飢ゑに臨みて死するもあれば、自害して臥すもあり。屍は道に横たはり、巷に満ちて夥しく、泣き叫ぶ声天地を動かし、ものゝあ



(5ウ・6才 軍卒ら、庶民を陵辱する)

はれをとどめしかば、後いかならん董根が、身のなる果てこそ覚束なし。

かくて姫君【▼協姫。原作の猷帝】をはじめとなし、その夜御殿にかゝり繋がる、人々を輿に乗せ参らし、まづはや御座を移しまつりて、その後なる館には、これにもまた火を放ちて、焼きたつること夥しく、さしも美々しき大殿に、四方より火をさしたれば、炎一つに連なりて、地獄変相の絵に異ならず。瞬くうちに焦土となりて、ありし館のさまはなく、もの凄まじきありさまなり。董根は調布をして、御靈姫【靈帝】その余の御方、誰彼を選まずして、御墓をば○右／＼○左より掘り暴かせ、棺に収めあるところの、金銀はいふもさらなり、その余目立ちし品物は、一つも残さず奪ひ取らすに、付き従ふ軍卒らも、よき事にしてありとある、◆／＼塚を一つ／＼うち暴きて、物をかすめ取りければ、取り漏らせしはなかりけり。董根はまた財宝数多を、車につけてとり運ばせ、人の眼を驚かせり。

かゝる様子ので聞こえあれば、相坂【汜水関】・石部

【虎牢関】に集まりたる、女房らはことごとく、みな東山に馳せ至るに、中に堅田かたはいち早く、

二の巻へ（5ウ）

（二）

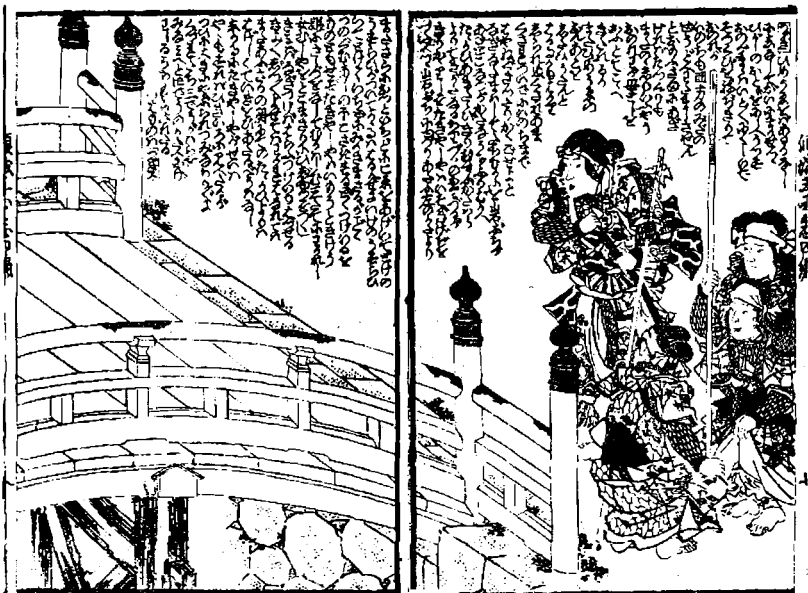
【吉の巻より】至りて遙かに眺むれば、火炎渦巻いて天に聳え、黒煙くろけむり地に敷きて、凄まじかりける姿なるに、堅田は下知げちを伝へつゝ、その盛んなる火を消させたり。しかするはしに諸々の、女房たちも集ひ来て、各々館の礎いしまたのみ、残りたるところに集まり、初糸いと【袁紹】に向かひて言ふやう、「今賊婦董根は、西の京に移るとて、混雑大方ならざれば、まさしくこの勢ひに乗りつゝ、彼を追ひ討つべきを、しかせざるは思ふ旨なん、おはするや」と問ひけるに、初糸は胸をかき合はせ、「さればそのことにこそ。追ひ討ちせんと思へども、軍卒ばらのいたく疲れて、進むとも益えきなかるべし」と、言ふを滝夜刃たきよしな【曹操】聞あへず、下／＼上より「賊婦董根御殿おとどを焼き、かしこくも姫上の、御座を移し参らして、都は上を下へ返しつゝ、いかにともせん術すべ知らず。これ全く、天道てんたうの彼を滅ぼせと、告げ給ふ時なるべければ、この期ときを抜かさず追ひ討つ時は、やがて天下は穩やかならんに、次へ（6オ）／何どてかく各々方も、進み給はぬは訝し」と、言葉激しく座



(6ウ・7オ 滝夜叉、董根追討を主張する)

中を見れば、諸々の女房らが、言葉等しく「我々も、初糸ぬしの旨に従ひ、軽々しくは動かじ」と、言ふに滝夜叉怒りを含み、つと立ちながらあざみ笑ひて、「臆病風に誘はれし、童に等しき者とは、共に計るに足らざりき」と、言ひ捨てやがておのれのみ、手勢引き具しこの所を、去りつ、妹の桔梗姫【曹仁】・菖蒲姫【曹洪】、また岩淵【夏侯淵】・信楽【楽進】・玉蔓【李典】などを伴ひ、はや日の暮るゝをことゝもせず、あとを慕ふて追ひ討ちせり。

董根は姫上を、我より先にやり参らせ、おのれは数多の女兵を従へ、三条の橋にさしかゝるに、●／＼山紅葉夕榮【徐榮】といふ女房、道のかたへに出で迎ふ。董根喜びを述べ聞こふるに、杏がかたはらより、董根に進み近付き、「館移して混雑の、その虚に付け入り誰ありてか、おん跡を慕ひ追ひ討つ者、あるまじとも言ひがたければ、右へ／＼左より夕榮ぬしのこの所へ、出向かはれしこそ幸ひなれば、その手の者を此河原に、伏兵にさしおかれ、もし追ひ討つ者ある時は、此所にて遮りとゞめ、



(7ウ・8オ) 夕栄、敵を待ち受ける

その余にも兵を伏せ置き、彼と戦ふそのはしに、横矢をかけて斬り立てなば、立つ足はなかるべし。この議はいかゞ」と誇り顔に、言へば董根手を打ちて、喜ぶこと大方ならず、夕栄にももの数多取らせて、その旨を得させつゝ、また調布に言ひつけて、彼をもこゝに留めたり。□かゝるべしとも知らずして、滝夜刃手勢引き具して、揉みに揉んで追ひ来たるを、調布早く支えとゞめ、からくとうち笑ひ、「げに杏が計るに違はず、胆太くも追ひ討つ者かな。灯火に奇る虫同然。いでひと捻りに潰してくれん」と、悪口放つて出で向かふ。滝夜刃もこの体を見て、ともに発言放つて言ふやう、「盗人女の董根めが、次〔6ウ・7オ〕／〔続き〕姫上をば有るか無しににして、我意にまかせつゝ、東の御殿を西へ移す、おのがまゝはいとく憎し。いでそつ首をねち切りて、おのが命も西方の、弥陀の浄土へわたましとせん」と、思ふさまに嘲れば、調布もまた罵り言ふやう、「おのれ我が母刀自を、追ふとてこゝへ来たるか。また姫上のおん跡を、慕ひ討たんと計るかも、計り知られぬ腐れ女。

腐れついでに命まで、はや根腐つたり覚悟せよ」と、長刀回してたち向かふを、岩淵が姉常夏【夏侯倅】が、刀うち振り迎へ戦ひ、数多度斬り結ぶ。かたはらより敵方なる、塵塚の折鶴【李催】が、斬りかゝりしを滝夜刃は、急ぎ下知を伝へつゝ、岩淵に譲り与ふ、左の方よりまたさらに、おつと一度に声をあげ、凍解の薄氷【郭汜】凍て解けて、一度に水嵩まさるがごとく、つのごむ葦の矛先鋭く、つけ入るを物ともせず、滝夜刃は妹桔梗姫に、指図をなして向かはしむ。三たてに分かれし女武者、男勝りに秘術を尽くし、斬れば薙ぎ突けば払ふ、つけ入り外せる虚々実々、寄せては分かれ離れては、また相坂の関にての、戦ひよりは激しくて、勢ひ当たるへうはなし。しかるに滝夜刃が勢はやゝもすれば、引き色に見へたるが、つひに大きに破られつゝ、みな散りぐに崩れたち、三条河原を南へと、四条の方へ逃げ走る。討ち漏らされたる兵は、次へ(7ウ・8オ)／続き三四十人には過ぎざりけり。

かくて敵兵追ひとゞまりて、慕ふ者もなかりければ、

滝夜刃が手の者は、とある所に足をとゞめて、飢ゑたりければ腰兵糧を、使はんとなしたりき。時はこれ二更の頃に、月のいと明く真昼のごとく、あたりに物音なかりしが、にはかに関の声起こりて、夕栄が下待ちなしし、兵ら一度に出づれば、滝夜刃慌て小道を求めて、足に任して逃げ行く程に、一つの坂にかゝりたり。図らずも夕栄と、面をはたと合はするものから、滝夜刃は身を翻し、逃げ行くを夕栄は、携へ持ちし弓に矢つがえ、がつきと射るに、その矢たちまち滝夜刃が、肩先にはつしと立つを、抜く間もあらねば矢を負ひながら、いと草繁き細道を、たどりたどり走るうち、草の内に伏兵ありてや、右

次へ(8ウ・9オ)／続き刀の下に兩人が、首打ち落と



（8ウ・9オ 菖蒲、滝夜刃の危機を救う）

して滝夜刃を、助け起こさんと立ち寄り見れば、此時滝夜刃肩先の、矢傷痛みて堪へがたく、くらみ倒れて土べに臥しぬ。菖蒲は姉を介抱なし、呼び活かす時滝夜刃は、やうくにして心づき、我に返りてよく見れば、妹の菖蒲姫、我が身を救ひ助けしなり。滝夜刃菖蒲にうち向かひ、一救ひ給はるはさる事ながら、妾が命はいと危ふく、此所に死ななすなれば、御身はとくく立ち退き給へ」と、言ふに菖蒲は頭を振り、「いなく妾が従へ来たりし、歩卒たゞ一人あり。此者をして御身を負はせ、こゝをとく立ち退かしめ、妾はこゝに留まりて、ともかうも敵を防がん」と、言ふに滝夜刃妹を見やりて、「そは宣はする事ながら、妾生きんと思ふがゆゑに、御身は無下に殺しがたし」と、聞いて菖蒲はうち笑ひ、◆◆◆「わなみが命はありて害なく、またなきとてもこと欠かず。御身が命はなくてかなはぬ、大切の命なり。妹一人にかゝづらひて、ことを黙さん所にあらず」と、諫められつゝ、滝夜刃が、「我もし生き逃るゝものならば、まことに御身が力なり」と、言ひつゝ、やがてかの歩卒に、負



(9ウ・10オ 菖蒲、姉を背負って川を渡る)

はれてこゝを下へ／＼中より立ち去るに、菖蒲はあとに留まりて、「追ひ来たる者もや」と、しばらくたゞずみりたりしが、「今ははやこゝろやすし。追ふ者あらじ」とひとりごち、足を早めて滝夜叉に、追ひ付きし頃ははや、丑三つばかりなりけるが、後ろの方には又さらに、次へ(9ウ・10オ)／＼続き 関の聲響き聞こえて、追ひ来たる者ありければ、菖蒲は姉を負はせたる、歩卒をせりたて諸共に、脛骨の続く限りと、走る向かひにひと筋の、川ありて流れたり。「こは運の末なり」と、思ふ後ろは追ひ討つ兵、段々に近付けば、菖蒲は自ら手負ひの姉を、背に負ひて川に入り、命からん、向かひの岸に、這ひ上がる時追ひ討つ兵、□／＼此方の岸まで来たりしが、川を隔てて矢を射かくるに、滝夜叉・菖蒲は絞りもあへぬ、衣を着ながら逃れ去る。はや東雲と明くる空に、左の方をよく見れば、夕栄数多の手勢を引き具し、川上をおし渡り、あはい間近く進み来て、姉妹を擒にせんと、兵に下知なして、すでに危ふく見えにけり。(10ウ)

《第二冊 表紙》



傾城三国志四編 上帙下冊

喜鶴堂上梓

甲午新刊

趙雲 ▼ 駒絵内。中央は本作の村雲

雪麿作 国貞画

《第二冊 前表紙見返し》



午春 国貞画

三国し 四編上帙下冊

雪麿作 佐野屋板

▼ 題号に濃墨を用い、背景には薄線色を使う。

(三)

かゝる所へ、常夏【夏侯悖】・岩淵【夏侯淵】助け来て、「あな小賢しき女かな。二人の主に齒向かはゞ、手並みを見せん」と罵れば、夕栄これに怖れてや、あとも見ずして逃げ出だすを、常夏は追ひ近付き、後ろ袈裟にぞ斬つたりける。主を討たれて手の者は、蜘蛛の子を散らすがごとく、みな散り〜に逃げ散つたり。

かゝる所へ桔梗姫【曹仁】・玉蔓【李典】・信楽【楽



(11才 桔梗・信楽、駆けつける)

進】も、討ち漏らされし手勢を従へ、此所へ尋ね至り、滝夜叉はじめ誰々も、まめでゐたりし顔見合はせ、かつ喜びかつはまた、大きな負けを取り、滝夜叉が手傷を受けしを、憂ふことはなはだしく、■／■やうやくにして手勢をまとめ、滝夜叉姫をいたはりつゝ、ひとまづ河内へ避け入りて、なを軍兵を集めけり。

かなたの董根は難なくも、その夜大堰川の別館に、姫上を移し参らせ、おのればらも落ち着きて、心安げにゐたりけり。これより後、東の御殿を改めて、西の御殿と称へしとなん。

かくて数多の女房らは、東山に残り留まりしが、董根のために暴かれ給ふ、御霊姫その余の御墓を、とり収めなどしつゝ、その霊位を敬ひまつり、しかして各々陣所々々を、営みて退く中に、堅田は一字焼け残りし、眺望亭【建章殿】と次へ(11才)／統き名付けたる、一間を払ひてこれにをるに、この夜月星輝きわたり、暖かき風習々々、吹きてあたりも静まりぬ。堅田は端近くたち出でて、ふと大空を仰ぎ見つ、天文をも心得ければ、つら



(11ウ・12オ 堅田、毫光を怪しむ)

〳見るにおのづから、白気空中にあらはれて、その気
 大きに広ひろがりたり。堅田はいたく嗟嘆して、「こはまこ
 とに賊婦らが、はびこるに似て明らかなるべき、星の光
 を襲襲ひたるは、姫上を冒すなり」と、一人吐息をほつと
 吐きて、思はず涙はふり落ち、しばらく憂へに沈みし折
 から、かたはらに僕ありて、■指さし示して言ひけ
 るは、「南にあたりて五色の毫光、空にのぼりて天の川
 に、ひいえたり。あれ御覽ぜよ」と言ひければ、堅田は
 教えに従ひて、そなたを見れば言葉のごとく、いかにも
 毫光井の内より、たち上ること現前なれば、「こは訝し
 と言ひながら、いま一人の僕折助【袁紹同郷の兵卒】
 を、呼び出だして松明灯させ、井の内にならしめ、探さ
 するにこはいかに、一人の女の屍を、探りおこしたる
 ものから、かの屍を引き出ださして、自らつら〳う
 ち見るに、日久しけれども腐れ爛れず、そのさま御殿に
 仕へたる、女房のおもむきにて、両の手にてかき抱ける
 は、紫むらさき地に金糸きんいとにて、龍の形を織り入れたる、錦の袋
 に収めたる、短刀と思しき品なり。口を開きて引き出だ



（12ウ・13オ 堅田 短刀を得る）

せば、果たして一振りの短刀にて、抜けば玉散り氷なす、刃の威光あらはれたり。堅田は図らずこれを得て、何となく心嬉しく、冬川の行舟【程普】を、次へ（11ウ・12オ）／続き呼び出だしてしかぐと、ことの様を物語り、此短刀を見せしむるに、行舟これをひと目見て、嗟嘆に堪へず言ひけるは、「こはけしからぬ事もぞある。そもくこの短刀は、東の御殿御霊姫、世にいまそかりし時、御母は、皇后にておはししかば、帝より給はりたる、大切の御宝にて、御霊姫に譲り給ひて、それより後は東の御殿を、譲り受け給へる姫御子、必ずこの守り刀を、受け納めらるゝを例とせられて、いともかしこき御剣なり。唐土にての伝国の璽、我が皇御国にては三種の、神宝に等しかるべき、御宝にておはずぞかし。往ぬる頃十婦人【十常侍】らの、騒ぎによりて弁姫【少帝】、協姫の御二方、鳥部野わたりに出でおはせしが、御殿に帰りおはしければ、此御宝の失せたるに、心付き給ひたり。わなみつくとく考ふれば、今天此御宝を、御身に授けましくて、この後姫上の御位に、替はらしめ給ふになん。



(13ウ・14オ 折助、堅田の密事を初糸に告げる)

しかればこゝに長居せず、とくく伊予に帰り給ひて、別に大事を計り給はゞ、必ず事は成らんかし」と、言ふに堅田はいそくと、うち笑みながら座を進め、「わぬしが言葉理に当たりて、妾が胸と同じく合ひぬ。明日は病に託けて、諸々の女房たちに、辞し別れて伊予に帰らん。その旨を得給へかし」と、行舟にさし示し、様々ことを商議しつ、なを僕らをもたたく戒め、「かゝることありとばし、**下へ**／＼**上より**必ずな漏らしそよ。もしこの旨に違ひなば、**頭を刎ねん**」と言ひ含めたり。そが中に件の僕、折助といふ者は、はじめ初糸に仕へしが、立身せんと思へども、**次へ**(12ウ・13オ)／＼**続き**手柄を立つべきよしのなければ、しばらくまた堅田に従ひ、「何にてもあれ言ひ立てに、なるべき程の事あらば、それを手柄にいづれへなりとも、従ひて立身せん」と、思ひゐたる折に幸ひ、今宵図らず井に入りて、件のことの為体、漏らさず見聞せしものから、その夜秘かに陣屋を抜け出で、初糸がもて来たりて、かの事を逐一に、物語りなければ、初糸はうち喜び、まず折助に黄金を与へて、

この忠心を喜びきこえ、これを我が方に留めおきたり。

その明るる朝堅田は昨夜、示し合はせし言葉のごとく、病ある体にもてなし、初糸が寨に來たりて、「妾このごる病に冒され、しばしもこゝにおるに堪へねば、ひとまづ伊予に帰らんとすなる。さるゆゑに、御身をわざと訪ふは、暇乞ひをせんとてなり」と、何気なく言ひこしらへば、初糸はあざ笑ひ、「さは宣へど御身が病は、体の内にあらざること、妾よく知りすかしたり。御宝の短刀と、いふ病に冒されて、眼もくらみ給ふらめ。気の毒に侍るかし」と、当てこすられて顔の色を、失ひて堅田が言ふ、「こはけしからぬ言葉かな。何の故もてさることとを、宣ふやらん訝し」と、言へば初糸をあざ笑ひ、「そらとほけな堅田ぬし。おことが陳ずるとも、そをまことなりと誰か思はん。しきりに大事を企てて、女だてらに戦を起こし、賊婦董根を滅ぼさんと、するはこれ他ならず、みな姫上の御為なり。しかるにかの御剣も、姫上の御宝なれば、もしこれを手に入るとも、諸々の女房たちに対して、これを惣大将の、場を踏む主に収めさ

せ、賊婦董根を誅せしのち、また姫上の御許へ、返し奉らんこそ本意なるべきに、**右へ**／＼**左より** わぬしはこれを隠し収めて、故郷へ帰らんとせらるゝは、誓ひに背くの心根あり。大地を撃つ槌は外るとも、我が推量は外るまじ」と、言はれて堅田は轟く胸を、おし静めつゝ、「あなうたてや。身に覚えもなき濡れ衣にて、短刀などを奪ひ隠せる、妾なりと見給ふや。人ばし違へ給ひたるか」と、言はしもたてず初糸が、「眺望亭の井の内なる、ひと品はいつこにある」、「いなく妾もよりも、その品は覚えなし。かくまで妾を疑はるゝ、おことこそ誓ひに背く」と、互ひにせり合ふ言葉の戦ひ、初糸重ねて「とくかの品を、出だしてその身の禍を、まぬかるゝこそよからん」と、言ふに堅田は急きたちて、「天道も照覽あれ。わなみもし此品を、隠せしならば世の常の、病をもつて死すことなく、刃にかゝるか矢に射られて、死なんものを」と誓ひを立つれば、かたへにありあふ女房たちが、「堅田ぬしかくまでに、誓ひ給ふはかの品に、覚えなしと**次へ**（13ウ・14オ）／＼**続き**知られたり。さの



(14ウ・15オ 堅田、折助を斬る)

みな疑ひ給ひそ」と、言ひなだむれば初糸は、かたへを見返り黄昏の、夕顔【顔良】に言ひつけて、かの僕折助を、呼び出ださして目先へ、突き出だしつゝ、「これ見られよ。井の底を探りし折、この僕はをらざりしか。いかに〜」と責め問へば、堅田はいたくうち腹だち、ものをも言はでたばさみし、刀抜くよと見えたりしが、折助を斬つて捨てたり。

初糸も威丈高、「おことこの僕を斬るは、妾を謀るためなり」と、言ひつゝ、こなたも刀を抜き、堅田を目かけつつ立つたり。堅田も刀振り回し、刃と刃を合はせんとす。黄昏の夕顔と、金時絵文車【文醜】は、初糸を助けんとす。冬川の行舟、秋山の黄葉【黄蓋】、春雨の海棠【韓当】らは、堅田を助けて互ひに詰め寄り、すでに大事に及ばんとす。数多の女房みな等しく、双方を支へつゝ、「往ぬる頃壇にのぼり、誓ひを設け血をすゝり、共に大義をあげしならずや。それを今互ひにうち果たさば、誓ひしこともあだになりなん。聞分き給へ」と右左、おしなだめ言ひ諭せば、堅田はそのまゝと立ちて、暇も

告げずそこくに、支度調へ手勢を従へ、東山を離れつゝ、故郷伊予をさしてゆく。後に初糸憤りの、目尻引き上げ**右の下へ**／＼**左の上より**言ひけるは、「宝の剣をとり隠し、おのが故郷へ下れるは、伊予において、一人勢ひを振らんとすらん。そがまゝには捨ておかれじ」と、自ら文を認めて、我が腹心の小者にもたらし、その日津の国難波江なる、賭弓の矢表**【劉表】**とて、女の丈夫ありけるへ、かの文を送りけるが、その文の文言に、「此度かやうくのことにて、宝の剣を奪ひ隠して、堅田が伊予へ帰る途中を、遮りて給はれ。余は対面の上にごそ」と、こと短かに書き送りぬ。

しかる所に滝夜刃姫、三条河原の敗軍より、討ち漏らされの手勢を引き具し、入來れる旨言ひつぐにぞ、初糸は出で迎へて、ひと間の内へ案内なし、また諸々の女房らをも、おのが方へさし招き、酒宴を開きて滝夜刃が、心悶えを慰めたり。かゝりければ滝夜刃は、先におのが言葉を聞かれず、**次へ**（14ウ・15オ）／＼**続き**諸々の女房ら、戦ふ心なきことを、言ひ恨むれば初糸はじめ、い

づれも応へをなさざれば、滝夜刃は心の内、皆々異心を抱くものから、こと成るまじきを計り知り、酒宴終はるを待ちつけて、手勢を従へ東路を、さしてこゝをぞ立ち去りける。

通神玉章**【公孫瓚】**は、玄妙**【劉備】**と談合して、「初糸誓ひの**下へ**／＼**上より**主たれども、頼む甲斐なき者なれば、いつまでこゝにありとても、させることのあるべきならねば、とくく故郷にまからん」とて、雁の一連北をさして、越前の三国に至り、玄妙を残しとゞめ、おのれは故郷加賀国、篠原へ帰りけり。

こゝに又、遠山の黛**【劉岱】**は、貫之が妻橋立**【喬瑁】**に、糧を借らんと言ひけるに、橋立ものにかこつて、貸し与へざりければ、つひに口論を引き出だし、黛遂に橋立を、**四の巻へ**（15ウ）



(15ウ・16オ 難波の女侠たち)

(四)

三の巻より秘かに殺してその兵を、己が手に従へたり。初糸はまた諸々の、女房らの己が様々、故郷へ帰り去るを見て、おのれもこゝを立ち去りて、美濃路をさして赴きぬ。

さて津の国難波江なる、賭弓の矢表は、上へ／＼下よりまだ幼き頃よりして、雄々しき業のみ好みければ、こゝらに名たゝる女丈夫、四人に深く交はりて、友垣厚く睦まじければ、時の人難波江の、五人女と呼びなしたり。かの四人は、霹靂阿雷【陳翔】、雁金の阿文【范滂】、極印の阿千【孔昱】、布袋の阿市【范康】なり。この余また、蟻通七曲【檀敷】、都路の九重【張儉】・よろづはの甘巻【岑晔】、山嵐比良峰【嗣良】、雪崩越路【嗣越】兄弟に、七宝の瑠【蔡瑁】と呼べる六人、その群れに加りて、次へ(16オ)／＼続き何ごとをも助けけり。

▼陳翔から岑晔までが「江夏八俊」。彼らの名前は、原作でもここにしか現れないので、本人物との対応も、登場順に当てはめたに過ぎない。



(16ウ・17オ 越路・瑠、堅田の行く手を阻む)

もとよりも矢表は、初糸と仲のよかりければ、かの文を見てとりあへず、越路・瑠 二人の女に、兵を預けつゝ、堅田が通る道を遮り、剣を奪はしめんとせさす。堅田はそれと心もつかず、道にこれらに出で会ひしかば、越路に向かひて言ひけるは、「御身何故兵らをも、率いて道を遮り給ふ。心得がたし」と尋ねれば、越路は間近く寄り、「おこと元より姫上に、従ひまつれる身にしあるに、いかにしてかは御剣を、盗み隠して故郷に帰るや。とく御剣を残し留めば、大慈大悲のまなじりに、似たる妾が眼もて、見逃しやらん」と罵れば、堅田はいたくうち腹立ち、「しや小賢しき痴れ者よ。討ち取れや」との言葉の下より、黄葉が斬つてかゝれば、彼方の瑠 同じく斬りかけ、互ひに挑み戦ふたり。のちは矢表・堅田の二人も、力を尽くして自ら戦ひ、しばらく勝負も見へざりしが、のちは堅田がうち負けつ、辛うじて討ち漏らされ、兵を従へ夜のうちに、伊予をさしてぞ逃げてけり。矢表も相手なき、喧嘩のならねばせん方なく、もとの難波に引き返し、この旨初糸に告げたりけり。堅田はこ

れより矢表に、深く恨みを結びしとなん。

さればまた初糸は、美濃路まで至りしが、糧を絶やしてせん術なく、越前の敦賀には、若竹の節根【韓馥】あれば、これがもとへ使ひを遣はし、助けを乞はんとしたりしかば、腰元逢坂【逢紀】と呼べる者、初糸に向かひて言ふやう、**中へ** / **上より** 「こははしたなき御心なり。丈夫にも等しかるべき、いと猛々しき姫の身にて、天が下にはびこらんと、思す程にていかでかく、拙きことをし給ふやらん。何ゆゑ節根が許よりして、助けあるをべん」と、待ちおはさんはいと気長し。そもかの越前の敦賀といふは、船着きの港にて、土地の潤ひ大方ならで、金銀米穀に**▲** / **▲** 乏しからず。などで彼処を御身が手に、つけんとは思し召されぬにや」と、言ふに初糸頭を掻き、「妾もしか思へども、**次へ** (16ウ・17オ) / **続き** めぐらしぬべき手立てなし」と、言ふに逢坂うちほう笑み、「妾に一つの手立てあり。そを授け参らしなん。故郷加賀の篠原へ、帰りゆきたる玉章の、許へ秘かに、御文を遣はされ、御身諸共力を合はせ、節根が預かる越前の、

敦賀を攻め撃ちかの所を、二つに分けんと宣はゞ、玉章必ず同心して、節根を攻むるは案の内なり。しかる時に節根はまた、思慮薄き女なれば、必ず此方へ助けを乞はめ。その時敦賀へ至り給ひて、彼を助くる体にもてなし、ほしいまゝに働き給はゞ、手に唾して米穀は、いふもさらなり金銭をも、つかみ取りになし給はん」と、説かれて初糸横手を打ち、「よくこそ計りめぐらしたり。すぐさま文を認めて、玉章に送るべし」とて、逢坂が言葉のごとく、件の文を遣はずに、玉章はこれを見て、喜ぶこと大方ならず、すぐさま支度を調へつ、手勢数多を従へて、敦賀をさして攻め上る。

初糸はまた玉章が、攻め来るよしを節根がもとへ、人をもて言ひやりけるに、寝耳に水の思ひなれば、節根は慌て驚きて、月小夜の碓【荀諶】、割床の臥猪【郭図】を招き、「いかにしてかはよからん」と、うち語らへば碓が言ふやう、「玉章は加賀にありて、近国近隣を懐けつゝ、攻め来たりなば矛先鋭く、当たるべうは思はず。そが上玄妙・関路・飛鳥の、助けは虎に翼を添へたり。



（17ウ・18オ、節根、初糸の手紙を披見する）

この所は彼がために、奪はれんこと目前なるべし。今初糸は人に優れて、智にも長け心も猛く、手下の女房いと多く、そが上恩を施し敷けば、人みな敬ひ尊みつゝ、今の世の優れ者なり。御身かの人の助けを乞ひ、よろづを頼み聞こえ給はゞ、右の下／＼左の上よりかの人もまた必ず厚く、御身をもて扱はん」と、言ふに節根は言葉に従ひ、関屋【関紀】といへる女を使ひに、初糸がもとへ遣はし、救ひをぞ乞ひにける。

かたはらに秋草【耿武】といふ、腰元のゐあはせしが、節根を諫めて言ひけるは、「初糸美濃路にありといへども、糧の蓄えすら失ひて、いかにともせん術なく、身の極まりたる所なり。譬へて言はゞうない子の、人の手にかき抱かれて、もの弁へずあるに等しく、その乳をたへて与へざれば、立ち所に飢え死なん。いかにぞやその人に、救ひを乞はんとし給ふやらん。これ虎を引き来たりて、羊の群れに入るゝに似たり。いとく危ふきことぞかし」と、言へど節根は聞入れず、次へ（17ウ・18オ）

／＼続き「わなみはもと初糸主には、筋目ある者にして、



(18ウ・19オ 秋茸ら、初糸を襲う)

才もまたかの人には、いたく劣り、そが上に、古人も
 優れたる者を、選みて譲ると言ひき。おこたら彼を妬み
 嫉むは、心得がたきことにこそ」と、さらに受け引く
 気色なければ、秋茸ほとく吐息を吐き、「やがてこの
 地は初糸が、為に自在にせられぬべし」と、言ひつゝ、そ
 こを退きて、秋茸は関屋と諸共、さる方に身を潜めゐて、
 「初糸此国へ来たりなば、討つて捨てん」と待ちてをり。

かくとも知らず初糸は、かねて計りしその如く、節根
 が救ひを乞ふに任せて、手の者従へ敦賀に来たれば、先
 つ頃より隠ろひし、秋茸・関屋・関純 ▼関屋は関紀・
 関純を兼ねる】は此折しも、ものゝ陰よりたち出でて、
 初糸目がけて突いてかゝるを、「狼籍すな」と言ひなが
 ら、黄昏の夕顔【顔良】が、おし隔てて ■ / ■秋茸を、
 立ち所に斬つて捨つ。続いて関屋が突きかくるを、金時
 絵文車【文醜】が、言葉もかけず首うち落とす、すぐさま
 節根が館に入りて、対面を遂げ安否を問ふて、節根を
 崇むる体にもてなし、己が手につく豊田【田豊】・組糸
 【沮授 ▼第三編では「赤紫の組交】、手杵【許攸】



(19ウ・20オ 尾越、狙撃される)

らに言ひつけて、よろづのことを計らしめ、つるに節根を外になし、蓄へ持てる金銀米銭、ことごとく奪ひ取りしかば、**◆**／＼**◆**節根は今日の覚めたることく、後悔そこに立ちがたく、また手につきて助けとなるべき、者ともあらざれば、いかにともせん術なく、初糸を深く恨みて、一人館を立ち退きて、唐文の文卓【張逸】が許を**■**／**■**志し、彼を頼まんとて至りける。

次へ (18ウ・19オ)

続きさてまた此方の玉章は、初糸はや敦賀に入りて、おのれのみこゝを横領して、我をば外になしければ、腹立しき限りなく、妹鴛鴦鴨の、尾越【公孫越】をば使ひとなして、初糸がもとに遣はし、「敦賀をば、二つに分かてよ」と催促す。初糸尾越にうち向かひ「おことはまづ帰りおはして、姉御をこゝへと宣ふべし。わなみ姉御に對面して、相談遂ぐる事のあり」と、言へば尾越は暇を告げ、たち帰る道の傍ら、何者にてあるやらん、ものゝ陰より矢を射かけ、「我はこれ董根の、局に仕ふる僕なり。局の命に従ひて、かくの如し」と罵りく、つるに

尾越を射殺したり。尾越に従ふ僕らは、「一曲者やらじ」と言ひながら、こゝかしこ探せども、捕らふること能はざれば、せん方もなくすこゝと、主の死骸をかきもて抱き、玉章がもとにたち帰り、かやうくとつぶさに語れば、玉章いたく憤り、「かの初糸妾をもて、敦賀をば討つよし披露し、おのれまづ彼処に至り、ほしいまゝを働きて、つるに節根を追ひ退け、また妾をも欺きたり。そのみならず董根が、僕なりと偽りて、妹をば射殺し



(20ウ) 村雲、磐河に来たる

ぬ。この恨みを報ひなん。いで〜」と言ひながら、その夜すぐさま手の者従へ、越前敦賀のほとりなる、磐河【磐河】にぞ着きにける。

初糸も此よし聞て、おのれも磐河の橋のほとりへ、手勢を従へおし出だし、相互ひに競り合ひしが、急に息いたる玉章は、初糸が方なる金時絵、文車のためうち悩まされ、すでに危ふく見へたる所へ、年いと若き一人の乙女が、助け来たりて文車を、何の手もなく追ひ退くるに、玉章はかの乙女が、手並みに驚きその名を問へば、乙女答へて言ふ、「妾は下へ上より東国愛発山にて、村雲【趙雲】と呼はるゝ者なり。つらく初糸が心を察するに、表裏いふべうもあらずして、次へ(19ウ・20オ)／続き誠少なき女なり。それ故にこそ今日しも図らず、御身にこの対面を遂げ、志を言はんとす」と、言ふに玉章嗟嘆に堪へず、村雲が手を取りて、「ほのかに聞くこゝらわたりの、人みな心を傾けて、初糸に従へり。しかるを御身たゞ一人、妾がもとへ至り給ふは、いと訝しきことにこそ」と、問ふに村雲玉章が、かたはら近く

進み寄り、「世の中穏やかならざれば、●／●人の心も静かならず。願ふは妾仁義の人に、従ひて世の中を、鎮めんと思ふにより、わざ／＼こゝに訪ひ来たり、御身につかんと思ふにこそ」と、心隈なく語りけり。

〽世間無類おん顔の葉、白粉美艶仙女香。

同じく白髪染め葉、美玄香。

右いづれも四十八文づ。

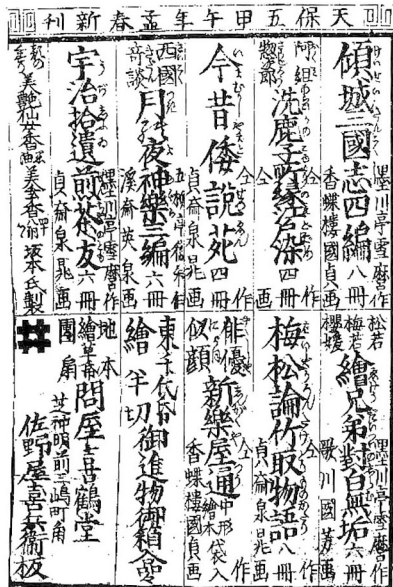
江戸京橋南へ一丁目東側角 坂本氏製す。

国貞画 雪麿作 清書 金川 (20ウ)

〈付記〉

今回紹介の第四編上帙は、『国書総目録』にも登載されておらず、底本以外には、松本市時計博物館の所蔵を確認できるに過ぎない。稀覯な本編について、早くに画像をご提供くださり、また本稿における紹介をも快諾していただいた佐藤悟氏に、末筆ながら深謝申し上げます。

《第二冊 後表紙封面》



▼奥目録「天保五甲午年孟春新刊」。本作は「四編八冊」とあるが、四編下帙の刊行は、翌年に持ち越された。他の雪麿作品は、『宇治拾遺煎茶友』が当年刊、『洗麿子所縁江戸染』が翌天保六年に刊行されている。

(かんだ・まさゆき 法学部准教授)